



天童郡天童町大江の大江天主堂。フランス人、ルドヴィコフ・ガルニエ神父が、私財を投じ昭和八年に完成した。神父は、明治二十五年、三十二歳で大江・崎津主任司祭として赴任。昭和十七年この地で永眠するまでの五十年、孤児院経営から住民の健康指導まで、宗教を越えた人徳で、人々のために力を尽くした。

# 祈りの場は、凜として天をさす

高台の緑の中に、その天主堂は建っていた。壮麗というよりは、つましやかに。けれど凜として。迫害に耐え、密かに信仰を続けた天童の人々の心を、象徴するかのようだ。

どこかで鶏の鳴き声がする。白い外壁が、南の島の陽射しに、いつそう白い。

「パアテルさんはどこにいる」――八十七年前の明治四十年。大江天主堂の神父を慕って、日の暮れた柚道

を大江村へと急ぐ五人がいた。東京から訪れた北原白秋と謝野寛たち。

「パアテルさん」の名はガルニエ。九州の小さな漁村で、ひっそりと信仰の灯をともし異国の司祭に、若い叙情詩人らは、あこがれに似た思いを寄せた。

神父は五人に、村の隠れキリシタンがひそかに伝えたクルスを示した。

五人が見たのは、紺碧の海に囲まれた美しい島の、山道よりなお険しい歴史だろうか、軒低い家々の奥で、ひっそりと捧げられた祈りの言葉だろうか……。今。隠れキリシタンの子孫は、教会への道をゆつくりと登ってくる。昼間、定置網で魚を捕らえ、海を見下ろすジャガイモ畑で収穫をする信者たちだ。たとえば、薄紫の、十二月の夕暮れどき。キリストの誕生を祝うために、三三五五ここに集う。もう長い年月、朝な夕な、そうしてきたように、今日も聖母像に向かって、老婦人は手を組む。その表情はおだやかだ。

昼なお暗い隠れ部屋のかわりに、ろうそくの明く輝く天主堂で。薄いわら座布団のかわりに、赤いじゅうたんに置いた椅子に座って。大江地区だけで三百五十人ほどの人々が、変わることを、祈りを捧げている。